大豊町民防災塾

第2回 ～自然災害を知る～

古代中国、孫子の兵法にある「彼を知り己を知れば、百戦して危うからず」は日本でも古くから有名です。

この言葉は私たちが自然災害に立ち向かう時にもそのまま生かすことができます。防災対策を講じるにも、防災行動を取るにも気象やそれに伴う災害の実態を理解していなければなりません。具体的な防災対策や防災行動については、この「町民防災塾」の中でこれから解説されることになるでしょうが、今回はその第一歩として自然災害に対する知識、『経験知』について考えてみたいと思います。

自然災害、例えば集中豪雨や大地震による災害がありますが、こうした災害を知るためには何も特別に難しい学問的な勉強（知識）は必要ありません。端的に言えば、適切な防災行動により身を守ることが目的であり、そのために必要な知識を身に付ければ良いわけです。そして、この「必要な（最小限の）知識」の多くは実は住民の皆さん一人ひとりがすでに『経験知』として自然に身に付けているものなのです。

大豊町で災害をもたらすような豪雨について考えてみます。

高知県、特に県の中部に豪雨をもたらすのは、南海上の土佐湾の方から北上してくる非常に湿った空気です。実際に湿った空気があるだけでは豪雨にはなりませんが、土佐湾に向かって南側に開いた高知県中部の地形が豪雨を生むひとつの重要な要因となっています。南海上から北上してきた湿った空気は、高知県中部の山塊に当たると強制的に上昇させられます。そして上昇した湿った空気は雨となって地上に降ってきます。下層に湿った空気が次から次へと補給される状況が続くと、激しい雨が数時間、あるいは十数時間にもわたって継続します。これが豪雨の仕組みです。

大豊町の皆さんはこうした豪雨をもたらす仕組みは、経験的に頭の中に入っていることでしょう。大豊町での豪雨災害を考える時にはこの仕組みを知っているだけで、防災のためにほぼ十分といえる知識です。では次に、その知識を実際の大雨の場面でどのように生かしていけばよいのか考えてみます。

データをひとつ紹介します。地域による違いはありますが、統計的には日本では1ミリ以上の雨の降る日がほぼ3日に1日の割合であります。単純に計算すると1年で約120日は雨が降ります。50歳の方であれば、物心がついてから少なくとも5千回は雨を経験していることになります。何事でも5千回も経験していれば、それは、「ベテラン」あるいは「名人」「達人」といわれる域に達しているといえます。こうした経験は前記の豪雨の仕組みと合わせて気象災害の防止に役立てることができます。日ごろ特に意識することもなく感じている雨の降り方も豊富な経験の裏付けによるものです。豪雨災害を経験した方々からは、必ず「今までに経験したことがない雨」「恐怖を感じるような雨」といった話を耳にします。まさに、こうした『経験知』に基づく雨の降り方に対する感覚を防災行動に生かすことが重要です。人間の五感は自分の置かれた危険な環境をきちんと察知して、それを知らせてくれます。大雨などの気象警報が発表され、雨の降り方が尋常ではなくなって来たと感じた時が、まさに防災行動に移らなければならないタイミングなのです。5分、10分といったほんのわずかな躊躇が危険を著しく増大させ、あるいは避難などの防災行動を困難にしてしまうことがあります。防災の要点は何といっても危険な場所から身をかわすことです。「危険を感じること」はすなわち『経験知』が災害から身を守るためのアラームを発していることであり、自らの経験に基づく知識こそ、防災の基本として常に心に留めておくことが大切です。

「大豊町民防災塾」に関する問い合わせ先 … 総務課庶務班 ☎⑨72－0450

まちのできごと

歩き・み・ふれる歴史の道

11月9日、 参勤交代北山道保存協議会の主催で高知市の土佐神社から布師田御殿跡、そしてかるぽーとまでの参勤交代道約10キロを参加者35人が歩きました。

当日はあいにくの雨でしたが、土佐山内家宝物資料館の学芸員や、「布師田の未来を考える会」の岡本さんから参勤交代道について説明をしていただき全員完歩しました。

次回（平成28年）は南国市で開催の予定ですのでぜひご参加ください。

立派な門松をいただきました！

12月22日、役場前で大豊町中学校の生徒が作った門松の贈呈式が行われました。

この門松は、大豊町中学校3年生の皆さんが、総合的な学習で作ったもので、役場の他にも、JR大杉駅、大豊町農工センター、おおとよ小学校に贈られました。

校長先生が門松の作り方を教えたそうで、立派な門松で新しい年を迎えることができました。

3年生の皆さん、ありがとうございました！

1月11日成人式スナップ集